

たるのみならず、將來の國民的發展に貢獻するところ少なくあるまい。

本邦驛制確立に至る迄の二三の考察

長谷川久一

十九世紀に於ける最も顯要な考古學上の研究として丁抹に於ての古墳の發見が能く擧げられる。丁抹は其の海岸線が非常に複雑な灣形をなして諸所に入り込んで居るのみならず、又水溜りといふやうな所が此所彼所にある。而して此處に出來上つて居る地層は灣入して居る所に沖積層を造り上げて頗る土地の變化に富んで居る。吾が國で之れに比較すべきは、東京灣利根川下流一帯及び濱名湖沿岸であらう。斯く此方彼方に小さい灣が奥深く入り込んで來て居る高臺の上に、貝殻が積もつて塚をなして居るのが澤山ある。抑もこれ等は何物であらうといふことになつて、該國の數多の學者が研究を始めたのである。其の研究の結果として遂にこれ等の貝塚は、其の丘上に貝殻が自然と積み上がったのではなく、これ等は全く人類の手に依つて持ちきたされたものであることが解つて來た。即ち往古の住民が此處を住居として居て、其の食糧として貝を食ひ、其の空殻を棄てたものと判明して來た。之を段々掘つて行くと、當時の住民の使つた石器やら土器の破片が出て來た。の

みならず現在には丁抹あたりに住んで居ないベングイン鳥の骨などが出て來たので動物の移動の情況等も解り、ヨーロッパの古代史とか人類の古代研究の學術の上に一大變化を齎したことは、夙に一般に知られて居る所である。丁抹海岸に於ける貝塚の發見が各國の學者間に喧傳せられた結果、アメリカにも確に同様のものがあるにちがひないといふことで段々詮議の末、フロリダのセントジョーンズ河の畔に澤山の貝塚があることが、アメリカの學者の手に依つて發表せられた。斯くアメリカの學者間に興味と研究心とを唆つたあげ、明治十年にモールズ教授がアメリカから日本に招聘せられて來て忽ち大森貝塚の發見となり、本邦古代の研究の上に一大進境を見出すことゝなつた。前述の如く丁抹貝塚と同様の地勢は關東や濱名湖に見出すことが出来るのであるから、今主として此の二地點に就て古代交通に關係ある事柄を聊か探究して見たいと思ふのである。

先づ大體論として見て以上の如く海岸若しくは入江に面した高臺に先人が多く住んで居つたといふ譯は森林のある所は之れを横斷するのに非常な困難があつた、ゆゑ其の當時の交通は入江や河川の水邊を傳はつて行くものであつたことを立證して居る。唯高臺で水に面し直ぐに魚貝類が容易に取れても其れ丈けでは食糧は十分とはいふことが出来ない。高臺の背面には鬱蒼として森林が茂げり鹿だの猪だのといふ食用に適し且つ其の肉が美味な獸類が居る所でなければ人は好んで住居の地とは定めなかつた。よし食糧は魚貝丈けで完全に足りて居るとしても陸上交通以外の水上交通に必要な丸木舟を造る木材が手近かに無ければ非常に不自由であるし、又日用の器具を作る

に骨角を利用するのは特に都合がよいから後ろに森林地帯のある地點に居を構へたものである。丁度上野の高臺本郷臺湯島臺等は東京灣の入江が入り込んで来て漣が打ちつけて居た所で後ろには繁茂した森林があつて前の水面は満潮の時には水があるが引き汐になるといふと干潟になる。そうすると牡蠣蛤鹽吹貝等が手づかみに出来るし、南向きで日當りはよし原始的生活には尤も適當した所であつたに相違ない。即ち本郷の岩崎男邸内の貝塚西ヶ原の貝塚等の研究に依り澤山の民衆が住んで居たことが解るのである。段々陸地がふえて行つて現今では特別に深かつた不忍池が取り残されてしまつたのである。ブラウン氏が會つて黒海の海岸線は湖水を残して沖積層を作つて行くといつて居るが、吾が國でも不忍池や千束池又霞ヶ浦など其の適例といつてよからう。

然らば當時の民衆が凡べて水邊にばかり住んで居たのかといふとあながちそうではない。つまり南面した水邊の高臺に住み主として漁りをするといふ部族と、奥地即ち山の手に居て主として狩獵ばかりして居た部族と二つの大別があつたと見做すことが出来る。これは種々の遺跡や遺物に依つて判定する次第なのである。而してこれ等の二大部族は互に海のものゝ山の物とを交換して有無相通することにして居たらしい。こゝに交通が頻繁になり市といふものゝ始まりが出来た譯で追々と經濟の發達を見るに至つたのである。

市の語源に就ては、市は五十路(イソヂ)の約まつたものであるといふ説と天八達之衢(アマノヤチマタ)又は八十衢(ヤチマタ)の意であるといふ説や色々ある。新井白石は其の著「東雅」の中に「市讀んでい

ちといふいは集なり、ちは道なり、いちは百貨集り來る道を云ふなり」と論じて居る。何れにしても市は交通其のものゝ意義に他ならない様に思はれるのである。

而して當時の聚落、村落の有様はどういふ風であつたかといふに、北海道樺太千島等に殘存して居る竪穴の状態などから考へ合はせて見るといふと、數戸若しくは十數戸集合して居たものらしく考へられる。之れから推論して關東地方に於てもさうであつたらうと斷定して差間はない。西ヶ原の貝塚や小豆澤の貝塚などに實に澤山の貝殻が殘つて居る所から見ればその附近に五軒や十軒の住家があつたに相違がない。自然これ等の聚落が驛家となつたのであつて、常陸國風土記の記事から斯く推定することが出来る。

(上略平津驛家。西一二里有岡。名曰大櫛。上古有人。躰極長大。身居丘壘之上。手採唇。其所食貝。積聚成岡。時人大朽之義。今謂大櫛之岡。其殘跡長四拾餘步。廣廿餘步。尿穴趾可。廿餘步。(下略)

即ち昔此の大櫛の岡に、極めて長大な人が居て、蛤を採つて食つて居た。其の食ひ殻の貝が溜り溜つて一つの岡をなした。即ち貝塚が出來た。時の人大朽の意味から取つて岡の名前にした。それが今大櫛の岡といふ名前になつて來たといふのである。それから尙ほ續いて其の巨人の踏んだ足跡が今も殘つて居て長さが三十餘歩、廣さが二十餘歩もある。チヨイト不潔な話ではあるが、放尿した穴の大きさが二十餘歩もあるといふ記述である。鳥居龍藏博士は、此の記事は貝塚に關する世界最

古の記録だといふて居られる。而して此れに依つて貝塚のあつた處に聚落のあつたこと、其れが進歩して後に驛遞の制度の出來た曉に驛家となつたといふことを覗ひ知ることが出来るのである。前述の如くに水邊に面せる形勝の地點が先史時代の民衆の住居地であつた。其の聚落が又段々と發達して驛家となつて行つた。同じく常陸國風土記行方郡の節に、

從此往南十里。板來村近臨海濱。安置驛家。此謂板來之驛。其西榎木成林。

即ち當時に在つては、村落は森林の附近を選んで土着したことが此の記事にもあらはれて居る。此れが現今の潮來町であつて丁度水邊に面した理想的の處であつたのである。斯く大約千三百年以前の和銅年間常陸國風土記の編纂せられた時には霞ヶ浦に海水がは入つて來て居た。此の附近には石器時代の遺跡が非常に多いが能く調べて見るといふと皆鹹水産の貝塚であつて淡水産のものは無い。以て以上の記事が極はめて正確なるの證左となすに足るであらう。

當時の民衆は鳥をとり獸をうつため盛に石鏃を用ひて居た。此の石鏃の形は大別すると二つになる。一つは柄のないもの、一つは柄のあるものである。關東地方では前者が先づ普通といつてよろしい。而して之れを作る材料は礫石又は黒曜石であつて、此の黒曜石の如きものは武藏野には無くて、近くとも信州の八ヶ岳山脈の附近あたりから産出するのであるから、夫れ等の山手に住む部族と交換を行つて得て來たに相違がない。然らば其の物々交換を行ふ場所は何處であるかといふに蓋し恐らくは八王子とか青梅とか々々それであつたと思はれる。始め極く小さな部落に過ぎなかつ

たのが段々交易が盛んになるにつれて都邑になつて來るといふ其の發達の順序が斯くして解説され得るのである。

霞ヶ浦沿岸上野臺大森山王等と同様濱名湖沿岸の高臺は地形が全く同様で先人が澤山住居したのは當然である。湖のまはりで貝塚の發掘研究せられたもの八ヶ所程に達して居るが就中知波田村の太田貝塚の中からは黒曜石の破片が發見せられ、入野村覬塚貝塚からも黒曜石製の石鏃が出て來た。(東京人類學雜誌第七十八號掲載若林勝邦氏報告)これは信州から持つて來たか又は信州を通じて日本海沿岸地方の黒曜石産地から持つて來たものと推測せられる。以て神話時代に於ても隨分國內交通と物々交換が盛んなものであつたことを判定するに足るのである。

偕てそれでは市で物々交換を行ふのは如何なる時期に於てするのであるかといふ問題に逢着する。これに就ても色々の説があるが一概に其の一つを採用する譯にはゆき兼ねる、要するに何れの説も棄て難いといふことに歸着することになるであらう。第一は歌垣の機を利用して市がたつたと云ふ説であるがそれは常陸國風土記香島郡の節に

又年別四月十日設祭灌酒。卜氏種屬。男女集會。積日累夜。樂飲歌舞。

とある。そんな機會に交易が多く行はれたと見るのは相當の理由のあることである。第二は反對説で祭祀なき土地歌垣なき地にも亦市はたち得たといふのである。同書茨城郡の節に、

漁獵逐濱州以輻輳。商堅農夫棹舳舻而往來。

とあるが如きは其の一例である。第三は地形説で自然に人が外出すると各方面から落ち合ふ様な地點には夫れ夫れ適當の慣習に従つて定期的に市がたつといふのである。道路の交叉點川の合流點山と平坦地との境といふ様な所が夫れだといふのである。今日の靜岡市や山口町の成立は確かに此の説によつて説明ができることは衆説の一致して居る所である。飯能や青梅も秩父山塊から廣潤な武蔵野高臺への出口であるがために發達した。飯能町は今日では常置の商業地として發達して居るが近年までは月に六回の市がたつた。而かも以前には飯能町のやゝ東北に當つて居る中山にも月六回市が開かれたもので今日尙ほ中山には村としては似合はしくない程廣い路幅の通りがあり昔の面影が残存して居る。吉田東伍博士が「日本歴史地理研究」の中に「町の由來」と題して簡明に説明して居られるのが能く此の邊の關係を詳にして居ると思ふ。

イチバは人民の交易場でどこにもあり又最も上古から早く見えてある筈のものです。現今では山海所々に、何市の地名が多いがそれは都會の跡ではなく、むかし往來の人の立ち留り、いさゝかの交易をなした名残である。和名抄に「店家俗云町」とあるから、商店のある所を町と俗にいふた。……永正六年の宗長紀行に「日光山坂本は人家數を分かず、京鎌倉の町有で、市の如し」と申すので、村里の一部よりして町といふものゝ生れ出た様子が能く見える。織田豊臣の天正慶長の年中には、町人や何町といふ事も多く見え、商工業の發達も既に著しく分る。それにしても、町といふものは伏見とか大阪とか博多とか、都會の下の小區分の名である。江戸幕府のことを考へ

ても江戸町といはぬ。單に武州江戸といふ都會を認めて居る丈で、そこに町といふは江戸の小區分です。古人も申す如く、江戸は庄名である。領名である。故に江戸の總名を負ふ行政否領分の下に、町もあり村もあり、寺社の私領も混じて居たのです。

斯の如くに交通は先史時代から盛んに行はれて居た。隨つて應神仁德諸天皇の頃から道路の開發、橋梁の架設、堤防の修築等が次第に書紀にあらはれて來るが、夫れ等は傳説的の物語として一概に排斥してしまふ可きものではない。一般文運の進歩と共に正比例して交通設備が整頓せられて行つたと思はれる節は諸種の資料に徴して明かなのである。而して外國との關係が一層複雑になるに従つて又更に交通の革新を促した。と云ふのは一には貢物やら商品として目新しい物資が齎らされて交易慾を唆られたると、二には彼國から文明の技術傳來して、其のため道路の改善等も促されたると、三には外客優遇接待のため、新に道路をつくり旅館を新築するの必要に迫られたると三つの誘因を列擧することが出來ようと思ふ。第一及び第二に就ては敢て特に例證を擧げるまでもなく容易に了解が出來るが、第三に關する史實は、書紀欽明天皇三十一年秋七月及同書の推古天皇十六年夏四月竝に秋八月癸卯の節を見ると云ふと、外國の賓客に對して特別の歡迎をしたことが出て居る。尙ほこれ等の場合はもとよりのこと一般に云ふてみても外人が多く渡來すれば、自然と色々な刺戟を受けて道路橋梁の設備がかなり整頓して行つたと見るべきであらう。遂には驛制の確立、大化二年春正月改新の詔、初修京師、置畿内國司郡司關塞斥候防人驛馬傳馬といふ所までいつた譯で

尙ほこの外にも幾多の考察や研究のあるのは勿論であるが、一應の瞥見を略述して見て切に大方の高教を仰ぐ次第である。

道路に關する費用の負擔に就て

堀切善次郎

道路に關する費用の負擔に就ては道路法第三十三條以下に詳細の規定が設けられ軍事國道及特殊の國道が國庫の負擔たる外國府縣道に關する費用は府縣費の負擔であるを原則とし例外として同法第十七條及同條但書に基く勅令に據り六大都市に於ては國道府縣道に關する費用も市の負擔とせられて在つて府縣の負擔ではない。何故に六大都市に於ては他の市町村と異りその管内の國道府縣道に關する費用に就て府縣の恩澤に浴することは出来ないか疑なきを得ない。或は六大都市に於ては財力他の市町村に比して優つて居るが爲めに府縣費の御厄介にならずとも自力を以て之に關する費用を負擔するに足ると認められたるが故であらうか果して然りとすれば此の考は必ずしも當らぬであらう。六大都市の何れも財源に窮することには於ては他の市町村と大差あるまじく而して急を要する施設事項は頗る多く停滯して居る狀況であるから六大都市必ずしも著しく財源に餘裕ありとも斷言し得まい。或は察するに市部郡部の三部經濟制が之れ等の六大都市に當時